



副会長  
正林 真之

## 「新たな一步」

～ Toward the Future: The Path to Innovation ～

今月のことば

*monthly word*

たいていの弁理士は、合格したときの喜びと感動を、昨日のこのように憶えている。そのときの希望や憧れ、尊敬する先輩弁理士といったようなことを、色々と思い出すこともできる。また、弁理士としての第一歩を踏み出すときの独特の緊張感や、初めて自分の弁理士バッジを見たとき、初めて自分にパテント誌が届いたときの一種の感激のような感慨も、憶えているはずである。ただそれは、それぞれが似たような体験であるにせよ、厳密に言えば一人ひとりが異なった独自の体験であるに違いない。

それと、確実に一つ言えることは、この弁理士試験に挑戦するにあたって「時間もお金もたっぷりあって、やることがないから、気が向いたので試しに受けてみた」というような人は、一人も居ないということである。たいていは、時間も無いところで時間を作り、なけなしの資金をはたいて自分に投資したに違いないのである。

けれども、悲しいことに、人間というのは「慣れる」ことができる。法律の勉強を開始した当初は、何もかもが新しく、大変な中にも、新鮮さに対する楽しみがあったはずである。けれども、新鮮さを失い、法律の勉強の苦しさ慣れてしまうことが、結果を出すことに対する大きな障害となることも、これまた大きな現実なのである。

それに、人間というのは、慣れ親しんだ方法を継続するのが一番楽だし、今自分が行っている方法が一番正しいと思っているものである。であるから、それを変革して「新たな一步」を踏み出す

というのは、とても大変なことなのである。

ここで、我々はもとより「知識労働者」である。これに関し、肉体労働は加算することができる。50人で動かせない岩は、100人揃えば動かすことができる。けれども、知識労働者は加算することもできず、分業することもできない。800のレベルの仕事が求められているところに、780のレベルの人が100人集まったところで、その仕事を完遂させることはできない。であるから、難事件が起こったようなときには、「誰でもよいから弁理士を100人ばかり集めてこい！」ということにはならず、「誰か良い弁理士を探してこい！」という指令が下ることになる。

そして我々は、我々自身がこういった厳しい選択の目で見られていることを常に意識すればこそ、自己のスキルに対する研鑽が必要であることは言うまでもない。であるから、日々の改善や改革は既にできていると思うところもあるかもしれない。

しかしながら、やはり「磨く」とことと「変える」ことは別であるということに、我々はもっと厳格に気づかねばならないであろう。もちろんこれは、日々行われているスキルの改善が、取るに足らないものであることを意味しない。それはそれで、とても重要なことである。けれども、「変える」ことというのは「磨く」ことよりも遥かに多くのエネルギーを必要とする。

翻って、多くの自治体を見ていると、起死回生

の手（ちなみに、その一つが「知的財産権政策」であったりする）が打っているのは、もうどうしようもないところまで追い詰められたところが多いように思える。まだまだ何とかなると余力を感じているところで、そういった大胆なことができた例は、少ないのではないだろうか。また、起死回生の手を打って、うまく行くほうよりも、うまく行かなかった例のほうが多い。ただこれは、起死回生の手が悪かったことを意味しない。むしろ、それをするのが「遅すぎた」場合が殆どである。

では、我々弁理士はどうであろうか。もちろん、日本弁理士会は瀕死の状態にはない。むしろ、まだまだ「何とかなると」余力があるほうである。であるから、そうしたところで「新たな一歩」を踏み出すのは、簡単なことではない。弁理士個々人も、日々のスキルアップの努力の中で忙しく、

「新たな一歩」を考える暇など無い、ということもあるかもしれない。

しかし、やはり“原点”に戻って、弁理士になろうと決意したときのことを思い出してほしい。時間も無いところで時間を作り、なけなしの資金をはたいて自分に投資したときのことを。

むろん、先輩弁理士の色々な業績や経歴を見るにつけ、自分にはもう活躍の場など残されていないのではないか、と思ったりもするものである。実は、かくいう私もそうであった。

けれども、あきらめることはない。また、日常に慣れている場合でもない。やはり「新たな一歩」を踏み出そうではないか。誰でも最初に踏み出せるのは“一歩”なのであるし、未来を予測する最も確実な方法は、その未来を自分で作ってしまうことなのだから。